

超越論的観念論について

— カントの空間論を中心として —

田 中 規 之

カントは、彼の空間・時間論の結論として、「超越論的観念論 (transzendentaler Idealismus)」という立場を確立したが、或る種の誤解が生じたため、著作のなかで一貫してこの名称を用いることができず、度々これを「批判的観念論 (kritischer Idealismus)」、或いは「形式的観念論 (formaler Idealismus)」と言い換えている⁽¹⁾。「誤解」とは、彼の空間論をいわゆる「観念論」と見做す批評のことであり、このために、カントは『プロレグーメナ』⁽²⁾に「付録」を書き、『純粹理性批判』⁽³⁾第二版に「観念論論駁」を書き加えたといわれている。ここでは、カントの空間論が、いかなる点で通常の観念論⁽⁴⁾から区別されるのか、また、「超越論的観念論」は、いかなることを主張する説であるか、という点を、主として「超越論的」という語のもつ意味との関連から見て、整理してみたい。

カントの空間・時間論は、へいかにして純粹数学は可能か⁽⁵⁾という課題の解決と深く結び付いている。⁽⁵⁾ 数学的認識は、ア・プリオリな綜合的認識であるが、「綜合

(Synthesis)」は直観によってのみ可能である。従って数学的認識は、概念をそれに対応する直観において示さねばならないが、ア・プリオリな認識であるがゆえに、ア・プリオリは直観、すなわち純粹直観において示さねばならない。それゆえ、純粹数学の根柢には、純粹直観が存している。ところが、純粹直観が可能となるには、困難な問題があるように思われる。というのは、純粹直観がもし可能であるとするなら、直観の關係する対象が存在しないのに、直観が生ずることになるように思われるからである。カントは、この問題を解決するために、直観の關係する対象、というときの「対象」のもつ意味を問うているように見える。たしかに、直観が物をそれ自体としてあるように表象するとすれば、対象自体に含まれているものが知られるのは、それが与えられているときだけであるから、この場合、すべての直観は經驗的であり、純粹直観は存在せぬことになる。しかし、直観が感性の形式に他ならず「対象」はこの形式に従ってのみ直観されるとすれば、この感性の形式が「対象」に対して先行しているといえるから、この場合、ア・プリオリな直観が可能であるといえるであろう。しかし、この場合には、感性の形式によって我々が認識するのは、それ自体としてある対象 (物自体 Ding an sich) ではなく、我々の感官に対して現象する (erscheinen) 対象 (現象 Erscheinung) にすぎない。こうして、感性の形式は同時に現象の形式となる。そして、空間と

時間がこの純粹直観に相当するものである。

以上の事から、主として空間について言えば、それは「まったく物自体に付着するいかなる規定でもなく、ただ感性に対する物自体の關係に付着する単なる規定」⁽⁶⁾である。従って、「物体」の諸性質のなかで、延長、場所などの空間に依存する性質（ロックの「第一性質」に相当するもの）もまた、物自体に所屬する性質ではなく、現象に所屬する性質であることになろう。こうして「物体」は、我々のなかの単なる表象と見做されることになる。

こういった主張は、たしかに、外的事物の存在を疑ったり、これを否認したりする觀念論と考えられるかもしれない。カントは、ここで、第一性質と第二性質に関するロックの説を引きあいに出して、觀念論から自己の立場を区別しようとしている。ロックの時代以来、暖かさ、色、味などの事物の述語が物自体に所屬するのではなく、その現象にだけ所屬する、という言い方は、一般に承認されてきたが、この場合、事物の存在はそのことによつて妨げられてはいない。これらに加えて、先に述べた、延長・場所などの第一性質に相当するものをも、現象に所屬するにすぎないと見做すなら、物体の直観を構成するすべての性質が現象に所屬することになるが、この場合でも依然として物の存在は否定されないというのである。物は、「我々には知られないが、それにもかかわらず現実にある対象」なのである。

このように、カントの立場は、通常の觀念論とは異なり、事物の存在（*die Existenz der Sachen*）にかかわるのではなく、事物の感性的表象にかかわるにすぎない。そして、超越論的觀念論を、事物の存在を疑ったり否認したりする通常の觀念論と混同することを防ぐのは「超越論的」という語である。この術語は、『純粹理性批判』で次のように定義ふうに説明されている。

「私は、対象ではなく、対象に対する我々の認識の仕方に、それがア・プリオリに可能であるはずである限りにおいて、一般にかかわる認識すべてを、超越論的と呼ぶ。」⁽⁸⁾

この「定義」においては、カントが空間・時間論を展開する際の、いわば出发点が語られているといつてよいである。「超越論的」という語は、二つの契機を有している。⁽⁹⁾一つは、対象に対する認識の仕方にかわる、という契機、他方は、それがア・プリオリに可能であるはずである限りにおいて、という契機である。まず、対象に対する認識の仕方にかわる、という契機に着目すれば、こうした「超越論的」見方から、空間とそのなかにあるもの（物体）の觀念性を主張する説が、対象にかかわるものではないゆえに、通常の觀念論から區別されることは明白となるといつてよいであろう。⁽¹⁰⁾

しかし、認識の仕方を問題とし、或る種の性質について、それが物自体ではなく、現象に所するにすぎないと見做すのは、先に述べたように、ロック以来、一般に

承認されてきた考え方であった。「超越論的」という語の第二の契機が示しているように、カントがそれを問題とし、その観念性を主張する認識の仕方とは、ア・プリオリに可能なものでなければならぬ。外的なものに係る表象では、空間だけがこれに相当する。空間以外には、外的なものに係る表象のどれからも、ア・プリオリは総合的命題（ここでは幾何学的命題）を導き出すことはできないからである、とカントは述べている。⁽¹¹⁾

従って、空間に所属する「観念性」は、空間以外のそういった表象（色、味などの表象）には所属しない。そして、ア・プリオリは総合的命題を導き出すということから、同時に空間の客観的妥当性（objektive Gültigkeit）が導き出されるといってよいであろう。カントにおいては、ア・プリオリな認識の標徴（Merkmale）は、普遍性と必然性であるが、必然的普遍妥当性（notwendige Allgemeingültigkeit）と客観的妥当性とは相関概念（Wechselbeziehung）なのである。しかし、空間のもつ客観的妥当性は、空間が現象の形式にすぎないため、現象に関しただけ、主張される。すなわち、空間は、経験的実在性（empirische Realität）⁽¹²⁾をもつのである。他方、「物が理性によってそれ自体として考慮される場合は」⁽¹³⁾、物に関して、空間は観念性をもつ。これは、空間の超越論的観念性⁽¹⁴⁾（transzendente Idealität）と呼ばれる。カントは、外的なものについて三つの事柄を区別したといえることができる。すなわち、第一に、感官の特殊な

位置や組織に対して妥当するにすぎない色、味などの表象（ロックの第二性質に相当するもの）があり、第二に、純粹直観としての空間があり、第三に、物自体がある。⁽¹⁵⁾空間は、現象の形式であるという性格をもつことで、単なる色、味等の表象から区別されて、現象としての対象客観についてのたりうるが、現象の形式にすぎないという性格をもつことで、物自体のいかなる性質、いかなる関係でもないといえよう。

〔註〕

- (1) Prolegomena S. 294, S. 337, S. 375. Kritik der reinen Vernunft B 519, Anmerkung
- (2) Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können. (1783) 引用の際の頁付はアカデミー版による。
- (3) Kritik der reinen Vernunft (1. Aufl. 1781; 2. Aufl. 1787) 頁付は第一版が A、第二版が B で示される。
- (4) カントの言う「通常の観念論」は、デカルトの経験的観念論（empirischer Idealismus）、及びバークリの神秘的・妄想的観念論（mystischer und sch-wärmerischer Idealismus）である。（『純粹理性批判』では「デカルトの観念論は」「蓋然的観念論（problematischer Idealismus）」、「懷疑的観念論（skeptischer Idealismus）」と呼ばれバークリのそれは、「独断的観念論（dogmatischer Idealismus）」

と呼ばれている。)

(5) 殊に『プロレゴメナ』では、分析的方法が採られているため、数学的認識がア・プリオリな総合的認識として事実存在することが前提されており、この前提から、空間・時間論が展開されている。

(6) Prolegomena S. 284.

(7) Prolegomena S. 289.

アディクセス (E. Adickes) は、カントの著作からの数多くの引用によって、カントにとって、物自体の存在が自明なものであり、それについて一言も費す必要のない前提であったと論じている。(E. Adickes, Kant und das Ding an sich 1929. 赤松常弘『カントと物自体』第一章を参照。)

(8) Kritik der reinen Vernunft, B 25.

ここまでの記述は、『プロレゴメナ』第一部に従っているが、この術語の定義については、空間と色、味などの表象のあいだの、いわば現象内部での区別を明確にするため、認識の仕方が、ア・プリオリに可能である限りにおいて、という契機をもつ『純粹理性批判』の定義を採りたい。

(9) 九鬼周造『西洋近世哲学史稿下』41頁

(10) カントが、超越論的觀念論を「批判的觀念論」と言い換えているのは、「超越論的」という語に含まれる「認識の批判」という意味を強調するためであったように思われる。

(11) Kritik der reinen Vernunft B 44 を参照。

ア・プリオリな総合的認識 (ここでは幾何学的認識) がそこから導き出される、という意味では、空間のもつ「超越論的」觀念性は、「空間という概念の超越論的論究」という場合の「超越論的」に類似した意味を有しているように思われる。すなわち、ア・プリオリな総合的認識として、幾何学的認識が可能であるための原理として、空間がもつ觀念性というほどの意味をもつように思われる。

(12) Prolegomena S. 298.

(13) Kritik der reinen Vernunft, A 28=B 44.

(14) 「超越論的觀念性」についての、このカントの説明は、先の B 25 における「定義」とも「超越論的論究」における「超越論的」の意味とも異なるように思われる。更にこれと対置される「超越論的実在性 (transzendente Realität)」が「絶対的かつ超越論的実在性」ともいわれている箇所 (A 36=B 53) から考えると、ここでいわれる「超越論的」とは実は「超越的 (transcendent)」と余り変らぬ意味あいをもつものではないかと思われる。

この点については、N. K. Smith, A Commentary to Kant's Critique of Pure Reason 2. ed. (1923) P. 76, p. 116, 117. H. J. Paton, Kant's Metaphysic of Experience (1936) P 144, n2. を参照。

H. J. Paton, Kant's Metaphysic of Experience. P 60-61.